説教20211017イザヤ53：4-12マルコ10：35-45「仕えられるためではなく仕えるために」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

先週は「わたしたちこそ神の家」と言うことをお話しました。「わたしたちこそ神の家」と信じて、歩んでいる私たちは、では、その神の家でどんな風に暮らしているのでしょうか。ヤコブやヨハネが想像したように、イエス様の右や左の席で偉そうに座っているのでしょうか。どうやらそうではないようです。イエス様はこの世に「仕えられるためではなく仕えるために」来たのだと、言われています。そんなイエス様の横で果たして私たちは、あぐらをかいて座っていられるものでしょうか。

私たちは当然、イエス様のように「仕えられるためではなく仕えるために」歩むのであって、皆に仕える者となり、すべての人の僕になるよう、イエス様から勧められています。私たちはこのことを今まで何回も聞いたことがあることでしょう。しかし、この皆に仕える者となりという御言葉は、確かに聞くたびに私たちの心を清らかにし、奮起させるに違いありません。でも、残念なことにそれが具体的な行動へとつながらないということも又事実ではないでしょうか。よし明日から私は皆に仕える者となろう、と力んでみても、意外にそれを実行していくのは難しいのです。

それを難しくしている理由にはいくつかあると思いますが、先ず、私たちは仕えるということが一体どういうことかが、実際にはわからなくなっているのではないでしょうか。例えば、江戸時代のように身分制が確立していた時代ならば、私は何々家に仕える家臣であるとか、私は、家で、家長である主人に仕えている息子であるとか、「仕える」という言葉が実態を伴って、具体的な場面で用いることが出来る言葉であったはずです。しかし、今の世の中ではどうでしょうか。極端に言えばもはや「仕える」という言葉は廃語に近い、用いられない言葉になっているのではないでしょうか。いやいや、そんなことはありません、国会議員の方は次のように演説されているではないですか、「有権者の皆さん、私は国家の公僕としてすべての方々に仕えてまいります」と声高らかに演説されているではないですか、という反論が聞こえてきそうですが、私たちは、この「仕えてまいります」という言葉が何回も反故にされていることにも慣れっこになっていて、ますます、「仕える」と言う言葉の実態は損なわれていくという悪循環を嘆かざるを得ないのです。

そして次に、「仕える」という言葉は、私たちが思いのままに想像力を働かせて意味づけできる幅がとても広い言葉であるということです。ヤコブとヨハネはイエス様の隣の席に座って、イエス様にお仕えしようとしたでしょうし、イエス様は、父なる神に十字架の死に至るまで、お仕えしたのでありますが、ここでの両者のお仕えの仕方は、まさに天地ほどの、違いがあるのです。ヤコブとヨハネは、この時、野心に満ちて、まったくこの地での立身出世といった世俗の事を想像しながらイエス様に対して「あなたにお仕えしたい」と言っているようなものです。だから、イエス様は38節でヤコブとヨハネに対して「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない」と言われたのです。この、分かっていない、という御言葉はきつい言葉で、あなた方とは話にならない、という意味ですが、彼らはイエス様からこのようにきつく言われても仕方がないことかもしれません。

そして第三番目に、イエス様が言われる「皆に仕える者になり、すべての人の僕になれ」と言うことが、私たち人間には、もともと実行しがたいことであるということです。イエス様は「皆に仕える者になれ」といわれますが、私たちは、この世で実際には、全ての人に対してではなく、ある特定の人に対してだけ、仕えようとしてしまうのではないでしょうか。このことは、仕えることと表裏の関係にある、支配ということを考えてみればはっきりしてきます。イエス様は、この地上での支配関係をイメージして42節で「支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている」と言われています。このような支配関係は、この地上を歩む私たちの身近にあることですので、私たちは腑に落ちることと思います。一人の支配者は、組織で、会社で、あるいは家の中で全ての人を支配し、とても息苦しく生きずらい状況を作り出してしまいます。そして、このようなつらい状況を作り出した原因は、支配者だけにあるのではなく、その一人の支配者に対して、人々がお仕えしてしまったということにもあるのです。この時、人は、その一人の支配者に対してだけ仕える者となってしまい、イエス様の言われるような皆に仕える者とはなれなかったのです。例えば、会社の中で、私はとにかくこの●●部長にこそ忠誠を尽しましょう、ですとか、家の中で、とにかくご主人にこそ愛をお捧げしましょう、などと言われれば、時代によっては、大変模範的で、誉め称えられる態度ともみなされるでしょう。しかし、それは少なからず一人の支配者を生み出し、その支配者から辛い支配を受けることに繋がってくることでしょう。このように私たちにとって最初から仕える相手を自分の意志で限定して選んでしまうことは大変危険なことであります。そしてそれは、イエス様が勧められている事とはまったく違うことなのです。

イエス様は　「皆に仕える者になれ」と言われました。この簡単そうな勧めは、実は私たちには実行するのが大変難しいことです。しかし、私たちは、ことの初めに、イエス様の御言葉に従って「皆に仕える者にな」ろうとするのか、あるいは、特定の何かに仕える者になろうとするのか、のどちらかの態度を選ぶことはできると思います。私たちは、イエス様を信じて、いつも「皆に仕える者にな」ろうとするほうを選んでまいりたいと願います。

ではイエス様に従って「皆に仕える者にな」ろうとするとき、私たちは、果たして、この世をどのように歩んでいくことになるのでしょか。

何度も申し上げてきましたが、私たちは「皆に仕える者にな」ろうと思った時点で、大きな壁にぶち当たることでしょう。しかし、皆に仕えること、全ての人の僕になることについて、心を清めて祈りながら黙想する時、一筋の道が示されてきます。それは、主イエスにお仕えしていくという道です。主イエスというお方は人となって、この世を私たちと共に歩んでいてくださる神様です。主イエスは、神でもあり人でもあるお方です。ですから主イエスの言われる御言葉は、この世の人間にもピンとくるところがあります。４０節で主イエスは、ヤコブとヨハネに対して「しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」と言われました。主イエスは、あなた方の昇進については私が決める権限は一切ないと断言されます。この世の事ならいざ知らず、ヤコブとヨハネはこのように断言をする上司に対して、もはやゴマをすることもできなかったでありましょう。ではあなた方の昇進を決めるのはどなたなのか、それは父なる神に他なりません。

子であるイエス様は、十字架にかけられる前にゲッセマネで「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」とひたすら祈られました。イエス様はいかなる時も、自分の意志ではなく、あなたである父なる神の意思に従う方を選ばれました。ここにはイエス様が父なる神にお仕えする基本的姿勢が吐露されています。イエス様の語られる「仕える」ということは「あなた」に対して自分の命さえもお捧げするということです。そして、私の意志ではなく、あなたの意志がなりますように、という願いこそ、私たちが皆に仕えるものとなるための基本であることが分かってくることでしょう。

私たちは、心を清め、まさに御子イエスが父の意志を選び、父なる神に最後までお仕えしたという事実を覚える時、また私たちも、主イエスの助けによって、皆に仕える者とされることでしょう。それは自分の意志なくしていく道であり、あなたの意志を活かしていく道であります。私たちの平生の、全ての人にお仕えするということもこの道に沿って行われていくことでしょう。

ただし、この道行の途上には常に大きな試練が待ち受けています。それは、この世にあっては、私たちが出会う人々の内、主イエスの事を知っている人や、信じている人は数少ないということです。私たちが対面する多くの人々はまだ主イエスを知りませんから、「皆に仕える者にな」ろうと言うことを、口で語りながら人を支配するために利用したり、本当にそうしようとしている人を非難するということも数多く起こって参ります。まさにこの地での支配と、天における支配とが実際に対立し始めるということですが、私たちはこのような試練を受けることをも又、主イエス様から告げられていたのではないでしょうか。

　そして、主イエス御自身は「多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」とご自分の事を話されました。私たちは、主イエスの受けた傷によって、私たちがいやされたということに気づいていませんでしたが、主イエスの盃を飲み洗礼を受けて、その事実に気付かされました。主イエスは我が身を引き裂いて、私たちが神への国へと向かう道を切り開いてくださいました。私たちは、そのことを覚える時、主イエスが言われる皆に仕える者へと、いつも変えられていくことでしょう。

　私たちは、イエスのように、皆に仕える者となり、全ての人の僕となって、この地上生涯を終えることが出来たら、本当に幸せなことではないでしょうか。本当の苦しみというのは、実は自分が安全だと思って自分の意志のほうを選び取りながら、そして最後に自分の意志を実現したと思った時に、現前と向き合わされることかもしれません。

私たちはこの世の試練を恐れず、常に主なる神の御心の方に聴き従って、皆に仕えるキリストの道を歩んでまいりましょう。

御子イエスは、ヤコブとヨハネに対し、誰が座るかを決めるのは私ではなく、父なる神であると言われて、彼らを戒められましたが、実は御子イエスと父なる神は一体でありました。一つでありました。その喜びを完全に味わうことが出来るのは神の支配が実現する最後の神の国での事かもしれませんが、いまそこに向かって歩む私たちも、日々、全ての者に仕えることの、その喜びをかみしめて歩んでまいりたいと願います。

祈ります

憐み深い父

あなたが送ってくださった御子キリストは、日々命を賭けて私たちに仕えていて下さいます。その計り知れない恵みに感謝しつつ、私たちも、あなたに仕えていくものとならしめてください。

私たちはあなた以外の者を目指し、お金や、地位や、また傲慢な自分自身に仕える時、全てを得たようで、かえってすべてを失ってしまう者です。どうかそのような偶像崇拝の罪から私たちをお守りください。

あなたは、死んだものも、まだこの地に生きる者も、全てに対し、その御手を広げて、仕えていて下さいます。どうか私たちがその信仰を守り、最後の日の大いなる喜びの完成の時を、共に迎えることが出来るようにしてください。

今日から秋らしい気温となり、夏の暑さから解放されましたが、どうか私たちの１日１日をあなたが祝福し、苦難の中にも、希望のともしびをその都度、恵んでくださいますように。

　父と聖霊と共に